

作品と作者の関係 植山俊宏

かにかくに渋民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川

石川啄木

私がこの歌に出会ったのは小学校六年生。啄木の伝記を読んでいた時だ。小学生向けなので啄木に対して全面肯定的に書かれていて、私の中であつといふに純粹善人啄木像が形成された。同時に短歌とは作品と作者は同一視して解釈するものという観念に固まつた。長じるにつれて、この短歌観はさまざまな矛盾、ハーレーションを起こして、自分自身を苦しめることになる。

作者の意図の追求（短歌では伝記も含む）は、戦前の国語教育にデュルタイン（ドイツの哲学者）の思想が入つたところから始まり、戦後「教育の科学化（明確な答え）」の流れに乗り、さらに広まり、中学校、高校の教師たちがこの考え方方に則つて解釈を「教えて」きたことは知られている。短歌における作者と作品の同一視には、この国語教育の流れが関わっているかもしれない。

作品と作者を切り離すべしという主張は以前から唱えられてきた。が、依然として一定の力をもつていて。歌会などのライブで匿名を申し合わせているにもかかわらず、自作の短歌の自注、自解を声高に唱える人がいる。また短歌界の大家でありながら、これを自ら行うものもいる。備忘録的な目的ならかまわないが、公

刊となるとその影響力、絶対力は計り知れない。無視、抹殺という方法で対処するのは、原理的には首肯できても、一理を認める感情も残る。とはいえ、難解な作品について解釈の手がかりが示されるように見えて、冷静に考えると、作者の誘導が行われているだけのことである。

読者には自分なりに解釈する権利があるのである。短歌は、短詩形文学として俳句と並んで情報不足を前提とした文学の形式である。情報不足を文化的な文脈、社会常識的な道理、人間の行動・心情の原理、合理的な論理などの読者側の情報で補つて「解釈」する。この文脈、道理、原理、論理を駆使し、他の多くの読者を説得できるように「解釈」を整理し、合理化することが必要である。読者には自分なりに解釈する権利があるといつても、思いつき、思い込みに基づく解釈は他の読者から相手にされない。相手にされない解釈は合理性のない解釈ということになる。

相手にすべきは表現者である。表現者とは表現を行う者のことである。表現者の人生は関係ない。とすれば、答えは明快である。解釈とは広く賛同が得られる合理的な意味の獲得であり、評価は合理的な意味の成立を可能にする表現の質によるべきである。作者自身の追求を放棄することは難しいことかもしれない。しかし、それは伝記的な事実をたどり、解釈の根拠とすることではなく、優れた表現を生み出した要因をさまざまにその人生に見出すこと、その程度と考えたい。